日本のクライミングの進展1965年から

須　田　義　信（第二次RCC代表）

この稿では、1965年から1980年前半にかけての日本のクライミングについて、私が体験したこと、あるいは見たこと、その時々考えたこと、感じたことをその一部ではあるがありのまま話してみたい。この約20年間に登攀技術や用具の変遷とともに日本のクライミングシーンが大きく変化したからである。

現代のフリークライミングの隆盛、アイスクライミングの飛躍的な進歩、これらの技術を融合し駆使したヒマラヤの高所でのアルパインスタイルによるバリエーションルートの初登攀などに通じる基盤が、この時代にある。

言葉足らずの点もあろう。しかしなるべく正確に客観的にありたいと思う。自分がかかわっていないことについては必要以外取り入れないつもりである。

またクライミングにかかわらずその分野の歴史は当然ながら人間が作っていく。ゆえにその人名も記憶の限り記してみたい。

1965年は日本のクライミングにとって画期的な進歩があった。名だたるアルプスの大岩壁を日本人でも登れることが実証された年となったのである。この年の８月の朝、マッターホルン北壁が日本人によって登られたというニュースが飛び込んできた。

芳野満彦氏と渡部恒明氏だという。心底驚いた。日本人でも三大北壁のような岩壁が登れるのだ、と。このひと夏にマッターホルン北壁、アイガー北壁、ドリュ西壁、同ボナッティー稜、同北壁が登られた。さらにナンガ・パルバットの単独初登頂を成し遂げたヘルマンブールが夜間登攀で登ったというアルプス最大の高低差を誇るバッツマン東壁なども登られた。それまでは外国の有名な登山家の本の中や映画でしか知りえない岩壁であった。

これらの岩壁に登ってみたい、自分でも登れるかもしれない、せめて実際に試してみたい、いくら望んでも行ってみることすらできない遠い夢だった。

しかし前年の1964年に海外渡航が自由化された。夢を抱いたクライマーが一挙に大挙してアルプスに押し寄せた。

マッターホルン北壁　芳野満彦、渡部恒明。
アイガー北壁　高田光政、渡部恒明（頂上直下で墜死）。
ドリュ西壁　星川政範、加藤滝男。
ドリュ北壁　吉尾弘、湯浅道男。
ドリュ・ボナッティー稜　大倉大八、長久実。
バッツマン東壁　大谷計介、橋本義男。
シャモニー針峰群　松島利夫、遠部勝行、飯田博子（ナンティヨン氷河でブロック崩壊により死亡）、林与四郎（ナンティヨン氷河でブロック崩壊により死亡）。

1965年の成果はまさに当時のクライマーたちの情熱のほとばしりそのものだった。第６級といわれる難度の日本人には不可能と思われていた大ルートであり、これらに成功したことは『挑戦者』（あかね書房発行1965年12月25日）などの記録を通じて若いクライマーに大いなる刺激となった。私もその刺激を受けた一人だった。「よしいつか俺だって」、それま

で漫然と描いていた夢が急に現実味を帯びた。それからは三大北壁やドリュ西壁を登ることが人生の目標になった。

この３年後、私もマッターホルン北壁やグランドジョラス北壁、アイガー北壁に向かった。

彼らの記録を調べるうち、私が目を見張ったのはマッターホルン北壁で芳野満彦氏が使ったというアイスメスあるいはアイススティッチェルと呼ばれるアイスピックのような氷壁用の用具だった。それまではマッターホルンの出だしの氷壁は300mにわたってカッティングで登るということだったが、これを使って一気に駆け上ることができたという。方法は単純で、左手にアイスメス、右手にピッケルのピックを握って交互に氷に突き刺して登って行くというものだった。そして私もマッターホルン北壁でそれを確認できた。

1965年の成果はアルプスの岩壁の神秘のベールを剥がし、日本人クライマーがヨーロッパのクライマーとまったくそん色ないことを証明した。

翌1966年には伊藤敏夫、石井重胤、伊佐忠義がグランドジョラス北壁、そして横尾康一と吉川昭がドロミテで特筆に価するクライミングを行った。とくにトッレ・ディ・ヴァルグランデ北壁カルレッソ・メンティルートはドロミテに於いて初めて６級上とされたルートだった（1936年夏初登）。このルートは核心部のオーバーハングした凹角のその難しさで名高かったが、彼らも桁外れの難しさであったという感想を残している。

彼らはアルプス六大北壁の一つといわれたチマ・グランデ北壁スーパーディレッティシマも登っている。550mにわたって真直ぐに延々と垂壁とオーバーハングをフリーも交え越えて行くルートだったというが、横尾はこのルートの印象を「日本の衝立岩の南さんのルート（雲稜ルート）の方がやばく感じた」と私に言った。つまり衝立岩雲稜ルートの方が技術的には難しく感じたというものであった。

日本人のアルプスでのクライミングは、その内容が分かってくるにつれ、日本人の能力も外国のクライマーとほとんど変わらないということが実感でき、クラシックルートの再登ばかりではなく、冬期の登攀やより難しいルートへの挑戦が当たり前のようになっていった。

冬期では、

・マッターホルン北壁冬期第４登（1967年２月）
　小西政継、星野隆男、遠藤二郎。

またアイガー北壁であれば1938年ルートの再登ばかりでなく以下のものがある。

・日本人直登ルート初登（1969年７～８月）
　加藤滝男、今井通子、根岸知、久保進、天野博文、加藤保男。
・1938年ルート冬期第２登（1970年１月）
　森田勝、岡部勝、羽鳥裕治、小見山哲夫、木村憲司。
・ハーリンルート冬期第２登（1970年２～３月）
　深田良一、遠藤二郎、星野隆男、嶋村幸男、三羽勝、小川信之、北壁通算第３登。

さらに数年後、フレネイ中央岩稜やブルイヤールの赤い岩稜、グランドジョラス北壁ボナッティー・ボーシェなど極端に困難なルートにも日本人がごく当たり前に成功して行った。また記録は発表されていないが1972年にはマッターホルン北壁のボナッティー・ダイレクトの右を直登する新ルートを古川正博、興津義訓、宮川勝が初登している（注１）

1965年当時は外貨の持ち出しは500ドルまでであった。レートは固定で１ドル360円。私は1968年に300ドルで３ヵ月間、１日３ドルくらいでぎりぎり生活できた。もちろん金銭的な余裕はまったくなく、移

動はヒッチハイク、寝食はテントと自炊、食事はパンにバターかジャムそれに卵焼きかハム１～２枚。これが定番で肉などはほんのたまにしか食べられなかった。私だけではなくシャモニー郊外のキャンプ場に滞在していた日本のクライマーの大半がそんなであった。

さて、話を転じてフリークライミングについて見てみると、その技術の水準はヨーロッパにおいても1968年頃は1920年代から少しも進歩していなかったようだ。この40年くらいの間、三大北壁やドリュ西壁やボナッティー稜など大岩壁がたくさん登られた。しかしそれはフリークライミングの進歩によってではなかった。Ｖ級ないしＶ＋より上の難しさは人工登攀で解決していた。

良い例が1968年当時のヨーロッパ・アルプスではほとんどのルートがⅣ・A1 で登られていた。初登時こそＶ＋くらいあったピッチが実際にはⅣ・A1 で登られていた。ガイドブックではⅥの表示もあったが実際の難しさはＶ＋くらいであり、そのピッチの登りかたはⅣ・A1 というのがごく当たり前だった。これは日本も全く同じで当時は日本のフリークライミングのレベルもヨーロッパもそうは変わらなかったと思う。

1965年に第二次RCCが日本で初めて岩場のグレードの研究成果を発表した。『日本の岩場グレードとルート図集』（1965年11月15日、山と渓谷社発行）であった。グレードの概念はグレード先進国のドイツとフランスを参考とし日本で初めて数字による六段階制グレードの体系化を明確にした。

50ルートがグレーディングされ、山域は、当時、本番の岩場と呼称されていた前穂高岳奥又白谷、北穂高岳滝谷、前穂高岳屏風岩、剱岳チンネ、北岳バットレス、谷川岳一ノ倉沢と幽の沢から代表的ルートが選抜された。それにゲレンデとして三つ峠の岩場が加えられた。

当時、「本番の岩場」とか「ゲレンデ」という言い方がごく一般的に使われていた。

現在ではその呼称に何となく変な感じを受けるかもしれない。しかし当時は、剱岳や穂高岳、谷川岳や北岳などの岩場は「本番の岩場」と呼ばれ、近郊の自然条件が厳しくないようなエリアにある岩場は「ゲレンデ」と呼ばれた。ゲレンデとは、岩登りの練習場という意味であり、本番の岩場に向かう前の練習場というとらえられ方であった。

三つ峠はそのような意味で当時は関東では代表的なゲレンデであった。

『日本の岩場グレードとルート図集』は日本の登山界に好評をもって受け入れられた。それまでは岩場の難しさは概念として、「易しい」「難しい」「かなり難しい」「極端に難しい」といった言葉で表された。その言葉の使い方は人それぞれでその人の感覚によったものであり、実際にどの程度の難しさなのかを知るには、はなはだ曖昧であった。そこへ数字でこのピッチはⅢ（級）、ここはⅣ（級）と明確に表示されたのだから私にとっては天啓ともいえる衝撃であった。私の友人たちも同様であった。

ちなみにこの時点で収録されたルートのフリークライミングの最高グレードはＶ（級）であった。

私は、岩登りで一番重要な要素である岩場の難度を数字できっぱりと表すことができた第二次RCCという集団に興味を覚えた。またこの1965年のアルプスの成果のほとんどが第二次RCC同人によるものであったからよけいに興味が増した。いつのまにか若い私はこのような集団と一緒にグレードの研究をしてみたいと夢見るようになった。

1968年にグランドジョラス北壁を登ったときにはまだRCCⅡに入会できていなかったが、自分なりに全52ピッチすべてをグレーディングし各ピッチの距離も入れたルート図を作成した。後年、長谷川恒男君がグランドジョラスの冬期登攀でこのルート図を参考にしてくれた。実に正確で役に立ったと感謝してくれた。同じときグランドジョラスに向かった森田勝氏もこのルート図をもっていってくれた。

1965年には画期的であった第二次RCCグレードも、1974年頃には大幅な改訂が求められた。それまでの間も収録ルートのグレードの見直しをしてきたが、もっと根本的にグレーディングシステムを見直そうとの意見が出てきた。そのころには私も第二次RCC同人となって数年が経っていた。

1974年、大幅な改訂作業に着手することとなった。私はグレード改訂委員会の担当理事となり、メンバーは広く外部からも募集することとした。

目的は、グレードをより正確なものにすることだった。一番の特徴はグレーディングの方法を大幅に変更することであり、具体的には一定の技量と見識を持ったクライマーによる合議制でグレードを決定するというものだった。

グレーディングの方法の変更に伴いルート数も増やすこととした。一番注意したことはフリーと人工の区別を厳密にしたことである。これまではハーケンをハンドホールドやフットホールドとして使用して登るのはごく一般的でそれをフリーと認識していた。しかしこれはどう考えてみてもおかしい。アブミを使わないだけで明らかに人工登攀的な行為であるからA0という概念を導入しフリーとは明確に分けた。

グレードの改訂には２年間を予定し会合は毎週とした。

メンバーの要件は、毎週の会合に出席でき、難しい岩場を数多く登っている現役クライマーであるということだった。そこで1974年に冬の一ノ倉沢滝沢スラブを登ったクライマーたちに相談をもちかけた。滝沢スラブは1968年２月の森田勝の冬期初登攀以後、雪崩の恐怖と氷の登攀の困難さからずっと誰にも登られなかった。

この滝沢スラブを冬に登ったクライマーたちならばグレード改訂のメンバーとして申し分ない。当時考えられ得る最高のクライマーばかりであった。彼らはこの滝沢スラブで第３スラブ冬期第２登、同冬期単独初登。第２スラブ冬期初登、同単独冬期初登の記録を持っていた。

私がこの改訂時にメンバーと申し合わせた事項はただ一つ。グレードで一番大切なことはそのグレーディングが可能な限り正確であること、それを目標としよう、それがクライマーの技術を伸ばす、であった。

グレード改訂委員会メンバー。

青木嘉夫、遠藤甲太、大宮求、高橋寛明、長谷川恒男、与田守孝、簑浦登美雄、大蔵喜福、（グレード研究会理事、担当者）須田義信、（グレード改訂委員会委員長）湯浅道男、（九州の岩場担当）三澤澄男、（出版担当、山と渓谷社）浜川悠。

グレード改訂作業は予定より数か月早く終えることができた。その成果は『新版日本の岩場』（RCCⅡ編1976年、山と渓谷社）となった。

グレード改訂によって収録ルートのほぼ全てのグレードがダウンした。各メンバーのそれぞれのルートグレードやピッチグレードへの評価が厳しかったことによるが、それが妥当性のある評価だったことは、A0の導入も含めクライマー間に率直に受け入れられたことで証明された。この本は収録ルート数

を増やしたので少々分厚くなったが、表紙は黄色でその装丁からか「弁当箱」と呼ばれ親しまれた。

この改訂の後、数年で（1978年頃か）日本にフリークライミングの波が押し寄せてくるが、その２年ほど前の1976年にはフラットソールを履いたことのある人すらほとんどいなかった。私にフラットソールでのクライミングの感想というものを書いてくれと「山と渓谷」から依頼されたほどだった。この年シャモニーのスネルスポーツで買ったばかりのフラットソール（EBシューズとの名称）の使用感を書いたが、今から思えば隔世の感がある話である。

フリークライミングの進歩は日本では1978～79年及び80年初頭から始まった。この頃になると戸田直樹や檜谷清、中山芳郎などを筆頭に日本でもフリークライミングが追求され始めた。

そのころヨセミテ詣でが一部のクライマーの間で頻繁化してきた。

1979年に戸田直樹と平田紀之が８ミリカメラに収めてきたボルダリングの映像が反響を呼んだ。当時キャンプ４というキャンプ場の中にある大岩のミッドナイトライトニングと呼ばれるオーバーハングのルートをジョン・バーカーが登る映像だった。高さは７ｍくらいあり、もしも落ちたら良くて大怪我、打ち所が悪ければ死んでしまうだろうという大岩だ。

８ミリカメラの映像は人物が動くだけに見る者に強烈な印象を与えた。オーバーハングの大岩を正確な動作ですいすいと登って行くジョン・バーカーに信じられない光景を見たような衝撃を受けた。私もその一人であった。これは８ミリの映像ばかりでなく、写真も1980年１月発行の『岩と雪』72号に載った。

戸田直樹はその映像をあちこちで披露し、その地のクライマーたちとその映像とともにクライミング談議に花を咲かせた。こうした戸田直樹のフリークライミングへの布教活動にも似た活動もあって日本でもフリークライミングが急速に普及していった。フリークライミングに目覚めた多くのクライマーたちがいた。

私は1980年８月、第二次RCCグレード研究の研究対象をフリークライミングと定め、期間は３年間を目途とし新たにグレート改訂委員会を立ち上げた。実際には３年間では終わらなかったが、メンバーは戸田直樹、中山芳郎、青木嘉夫、平田紀之、檜谷清、大内尚樹、グレード改訂委員長に須田義信、後半には森正弘も参加してくれた。

フリークライミングの能力は戸田、中山、檜谷は日本では抜きんでており、考え得る最高の布陣だった。

彼らと共に国内の岩場でフリークライミングの可能性を探った。対象は三つ峠、御在所、六甲だったが主に人工ルートのフリー化であった、六甲や三つ峠では従来の人工ルートやA0混じりのフリーとの境が曖昧なルートをいくつもフリー化できた。六甲では１ｍ半くらい水平に張り出したオーバーハングや、三つ峠では皆でよってたかってフリー化した「よってたかって」や巨人ルートのフリー化などが印象的だった。

また国内ばかりでなく1983年５月、ヨセミテで２週間の合宿も行った。この当時、デシマルグレードの存在はクライマーであれば誰でも知っていた。しかし日本グレードのⅤ（級）やⅥ（級）がデシマルではどれくらいに相当するのかはよく分かっていなかった。そこでその辺をはっきりさせようとデシマルグレードの本場のヨセミテで検証してみるのが目的だった。２週間ほどだったがデシマルと日本のグ

レードとの比較のよい参考になった。日本のグレード表記はUIAA（国際グレード）に準拠しⅤ（級）、Ⅵ（級）という表示だが、それがデシマルの5.9や5.10a などの表示のどのへんにあたるのかということを確認することができた。

1984年、ジェリー・モファットというイギリスの若いクライマーを日本へ招待した。きっかけは、当時、世界ナンバーワンと言われていたヴォルフガング・ギュリッヒが「マウンテン」に書いた彼の記事の中に「ジェリー・モファット」についての記述があり、それを読んだ平田紀之が直感的にジェリー・モファットこそ今の世界のトップだと感じたというのだった。

平田はぜひ彼のクライミングを見てみたいという。さらに日本の若いクライマーにも彼のクライミングを実際に見せてやりたい、さらに彼と一緒に日本の若いクライマーにも登ってもらったらどうだろう、世界のトップとのこのような機会を日本のクライマーに提供できるとしたら、われわれグレード委員会の目的とも一致する、ぜひやりましょう、という。

もちろん反対する理由はない。早速、平田がイギリスのジェリー・モファットの住所らしきところ宛に手紙を書くことになった。文面は、まずわれわれの主旨を告げ、われわれが負担できるのは往復の交通費と滞在費だけでそれ以外はなにも出来ないが、ぜひお招きしたい、同じクライマーとして日本に遊びに来ませんか、そしてあなたのすばらしい技術を私たちに見せてください、というものだった。しかしそのころジェリー・モファットは世界中の岩場を放浪しているらしいというので実際に手紙が届くかは分からなかった。

果たして来てくれるかどうか半心半疑だったが、驚いたことに彼らは来てくれた。ジェリー・モファット（21歳）ともう一人はクリス・ゴア（26歳）であった。迎えに出たわれわれが目にしたのは日本ではめったにお目にかかれないようなぼろぼろの衣類をまとった長髪のぼさぼさ頭の長身で気の良さそうな若者だった。

彼らは小川山、城ケ崎、奥多摩、湯河原幕岩とそれぞれの岩場の最高グレードのルートを登りその技術を私たちに披露してくれた。当時、日本での最高グレードは池田功が登った小川山のスーパーイムジン5.12b であった。

彼らのクライミングを目の当たりにした日本の若いクライマーたちは世界のトップクラスの実力がどのあたりにあるか、大いに参考になったに違いなかった。

彼らの来日では、保科雅則、平田謙一、堀地清次、堀越隆正など若いクライマーも彼らの岩場巡りに同行してくれた。また寄付金集めや諸事雑事にも大いに協力してくれた。保科雅則は城ケ崎のクライミングの時には川奈のご実家に私たちみんなを泊めてくれた。

こうして三つ峠、御在所、六甲、ヨセミテ、ジェリー・モファットと当初の計画よりやることは増えてしまったが、いちおうは初期の目的はほぼ果たし、1985年グレード改訂委員会は解散した。この時の成果はその後のフリークライミングの隆盛を目の当たりにするときそのことの意味を確信することができた。

私の体験として、これらのクライミングの行為を通じて学んだことは、一見不可能と思えることも視点を変え、考え方を変えてみれば視界も広がり、違った見方が可能となる、ということであった。これは山登りだけでなく人生を生きてくうえでとても大切な根源的な学びだと思った。

この当時、戸田直樹が口癖のように言っていたのが「意識の持ち方」ということだった。つまり、登れないと思うから登れない、登れると思って努力す

れば登れるようになるのだという信念を持つことが必要、ということだった。現在では当たり前の考え方である。しかし当時はまだ６級神話と呼ばれるような人間の能力では第６級を越える難しさの岩場は越えられないという考え方があった。つまり登れないという先入観に（一種の偏見に）縛られ、ヨーロッパでも長く（おそらく1920年代後半～1970年代後半まで）フリークライミングの停滞を生じさせることになった。

この６級神話から解放されるには、いくら難しく感じても自分には登れないと諦めず、考え方次第、努力次第、工夫次第で絶対に登れるようになると信じる、そして信じてやってみる、ということだった。まさに目から鱗の思いだった。

現在、自分の人生にこの時学んだことがどれだけ生かせているか自信が無いが、常に頭の中心にこの時の学びがしっかり居ついている。絶対に忘れないようにしている。

アイスクライミングの分野は以下のように1965年、そして1971年～1972年を境に飛躍的に進歩して現在に至っている。

詳細を見てみよう。前述のように1965年まではずっと大昔からピッケルによるカッティングが技術の主流であった。しかし1965年にアイスメスと呼ばれるアイスピックのような金属製の道具（アイススティッチェルとも呼ばれた）を使い、これを片手で握りもう片方の手でピッケルのピックを握り交互に突き刺し氷を登っていくことでカッティングの作業が大幅に省略された。従来からのカッティングのみの技術と比べれば体力的にも有利で、大幅な前進だった。しかしこの技術にも限度があって60度くらいまでの氷壁がようやくだった。それを越えるとハンドホールドのためのカッティングが必要となった。

1971年12月に現在に通じる画期的な道具と技術が出現した。この技術をピオレ・トラクションと名付けたヴァルター・セキネルがダン・デュ・カイマン北壁ラガルド・セゴーニュクーロアール冬季初登攀の時、初めて使った技術だった（注２）。

ピックが鷲の嘴のようにカーブしたピッケルかアイスバイルを両手に持ち、交互に叩き込んで登っていく技術で、従来の登り方と比べ非常に効率的で体力的にも楽でバランス的にも安定感もあり、氷には抜群に効くという。この技術によりアイスクライミングは飛躍的に進化した。

私がこの技術を知ったのは1972年７月にシャモニーに到着した日であった。当時、シャモニーに在住しクライミングに勤しんでいた友人たちからであった。

彼らはそれら自作のピッケルやアイスバイルを見せてくれた。スネルスポーツの地下でガスバーナーを使い先端を炙って曲げたという。

セキネルが前年12月のラガルデ・セゴーニュク―ロアール冬期初登で実践したこの新しい技術は現地のクライマーの間ではあっという間に広がり、半年そこそこでごく一般に知られたものとなっていた。ただこれらのピッケルやアイスバイルの市販品はまだ無かった。ゆえに自作のものを彼らは使っていたわけだった。私もこの年の10月、アレッチ氷河の40mくらいの懸崖で試してみたがその効果にただひたすら驚いた。将来的には道具に改良を加えて、90度の氷壁ですら可能ではないかと思わされた。（そして現実には日本で垂直の氷壁がフリーで登られたのは、この10年後の1982年１月の私の甲斐駒ヶ岳篠沢七丈瀑であった。おそらく初登か２登と思われる。）

日本にこの技術と道具が入ってきたのは翌年1973年の春頃であった。

アルプスでこの技術を駆使して登った日本人の記録にはドロワット北壁ジャン・クジ―ルート冬期初

登攀がある（1973年１月、鈴木勝、関野寿、中野融、青木嘉夫）。岩壁の全長1,000m余にわたってカチンカチンの氷で何度も撃ち込んでもピックが入らず従来の方法では（カッティングやアイスメスでは）とても登れなかっただろうとのことであった（青木嘉夫言）。

あれから今年で54年たったことになるが現在でもこの登り方はアイスクライミングの主流である。用具の改良は日進月歩でバナナピックと呼ばれるような形状のピックや握りやすいシャフト、高性能なスクリュ―ハーケンなどの出現で、現在は垂直の氷の登攀も一般的であり、さらにこれらの道具や技術を用いて氷だけでなく岩にもピックを引っかけて登るミックスクライミングと呼ばれる技術も積極的に取り入れられている。この技術はアメリカンエイドでのスカイフックの使用法に極めて類似している。

これらの技術を駆使して現代の6,000m級、7,000m級のヒマラヤでまさにハイパーアルピニズム（私の造語だが）とでも呼びたいような高次元なクライミングが展開されている。

一世紀前のアルプスの1920年代から1930年代の北壁群の攻略に似た現象が現代に再現されている。

クライミングにおける用具や技術の変遷は、そこに必ずそれを必要とした人間の創意工夫がありそれを頭の中だけでなく現実のクライミングに生かすために技術の習得があり肉体的な鍛錬も要求される。現時点では思いもつかないような技術や用具が今後発明されるだろうことは間違いない。それに伴って意識の変化もあるに違いない。これらはこれからもずっとそれを必要とする人がいる限り進歩し変化していくのは当然であろう。

本稿は技術については過去の話だ。過去の技術がああだったこうだったと言ってもあまり意味がない。過去はしょせん過去だから知識として知っておいてもよいがそんな程度だ。しかし、どうしたら難しい岩場や氷を登れるようになるか、安全に確実に登り切るにはどうしたらよいか、ひ弱な自分を知るとき、努力を重ねかつ結果を出してきた先人の偉大さに気付く。

（注１）

残念ながら古川正博氏と宮川勝氏はマッターホルンの登攀の直後の８月にアイガー北壁で墜死している。両氏の遭難時、私は直近のルートを登っていてその一部始終を目撃した。そしてその収容作業は私たちが行なった。

彼らは壁に取り付く前の２日間を私たちと一緒に過ごした。その折、このマッターホルンの新ルートの登攀の模様を聞いた。７日間のビバークを要したが一発で登ったとのことだった。不安定なピトンワークとぎりぎりのフリークライミングが要求されたという。この登攀のあと、アイガーに来る前に彼らはドリュ・ボナッティー稜も登っている。岩質が違うから一概には言えないがマッターホルンのルートの方がはるかに難しく感じたと語っていた。つまりアルプスでも有数の難度を持ったルートだと想像できた。その後今までに至るも彼らのルートが登られたという話は聞かない。幻の名ルートとなってしまいそっくり忘れ去られている。このルートの存在を知るのは初登攀のメンバーだった興津義訓氏とおそらく私だけになってしまった。

岩壁登攀の根本的な意味はフリーだ人工だというその手段ばかりにあるのではなく取り付いてから終了するまでのその全過程にもある、という観点からすればマッターホルンはその山容も文句なくすばら

しい、ルートも岩壁のほぼ中央部を直上している。古川正博という稀代の名クライマーと共にそのルートがそこにあるということに私は感慨を覚える。

（注２）

本稿にあたり菊地敏之氏のアドバイスがあった。ジェフ・ロウの以下の「　」内の記述についてであった。

ジェフ・ロウの『アイスワールド』で「1938年アイガー登攀中に撮られたモノクロの写真があるがそれによるとヘックマイアーは鋭くカーブしているとはっきりみとめられるピックのついたアックスを使用している」

同ページ（31頁）にはシュイナードの写真が有りそのキャプションに「(彼は) 1960年代には革新的な鋭く曲がったカーブをもつピックを考案した。1966年の夏、私は当時入手可能なすべてのピッケルをテストする目的でアルプスの氷河を訪れた。(中略) テストの結果いくつかのヒントを得た私はドナルド・スネルの世話でいやがるシャルレの工場で酔狂なアメリカ人のためのピックの曲がった長さ55センチのピッケルを作らせた。(中略) 私は従来のピッケルを改良してピックを振ったときに描く弧と一致したカーブをピックに持たせれば、氷への食い込みははるかによくなるに違いないという確信を持っていた」と記されている。

「1967年にシュイナードとトム・フロストがこのピックと同種のアイスハンマー、それと新型リジットアイゼン（シュイナードアイゼンとわが国ではよばれた）を用いてシェラネバダで多くのアイスクライミングを行った」とある。

マッキンズ・ピッケルに関しては、前出のロウの『アイスワールド』に「シュイナードのカーブしたピックと同時期に開発されたマッキネスのテロダクティル（スコットランドやカナダで好んで使われた）が普及してアイスクライミングは一変した」と記されている。

以下、須田記。

これらの記述を見る限り先の曲がったピックの開発は、60年代後半であったか？

しかし実際にピオレトラクションの技術が採用されたのはアルプスでは1971年12月のヴァルター・セキネルとクロード・ジャジェールのラガルデ・セゴーニュク―ロアールが最初であることは間違いないようだ『氷壁の履歴書』(51頁～。ヴァルター・セキネル著。鈴木勝訳。1977年月日初版発行、山と渓谷社刊)。

また、アイガーでのヘックマイアーの登攀記録にはカッティングは出てくるが、ピックの先端を雪や氷に引っかけて登るような記述は無い。ヘックマイアーの記述には当時としては斬新な技術であった先端の出たアイゼン（いわゆる出っ歯アイゼン）の使用で大幅に時間を短縮できた、との記述は有る。